

## 編 集 後 記

私は編集委員会に加えて頂いたばかりの新米編集委員である。新米からみた編集委員会の現状と論文執筆についての私見を述べさせて頂きたいと思う。編集委員会は嶋田担当理事、佐治編集委員長のもと、17名の編集委員、2名の編集幹事が集まり、月に1回行われる。以前は各委員の専門分野だけでなく広い範囲にわたって査読論文が送られたが、現在は主に専門分野の論文が送られてくる。2名～3名一組でチームを作り、同じ論文を査読して意見を出し、編集委員会で発表する。意見が異なるときにはほかの編集委員の先生方を交えて討論となる。驚かされたのは編集委員の先輩達が大変丁寧に査読論文を読み、非常に鋭い指摘をされること、討論が非常に活発でときには厳しい意見が出ることである。このようにして毎回約3時間にわたり委員会が続くと一番若輩の私でも正直、少し疲れることがある。先生方が多大な努力をして投稿した論文はこのようにして公平に、また皆が精力を傾けて検討されているのである。

医学のデータは論文となってはじめて体系化され、周囲から淘汰されて残った論文が最終的に医療に役立つ論文となる。この目的からすればおのずと論文の書き方はある程度明確になる。すなわち、ほかの人に十分理解してもらうことが必要で、それには論文の背景、目的を明確にし、内容は論理的で、余分な内容を削りとって簡潔に主張を伝える文章にすることである。また、文語調は読みにくいため口語調の文章が良い。

内容の優れた論文は多くの人に知ってもらうために積極的に英文にすべきである。日本消化器外科学会にも英文誌(Digestive Surgery)が誕生した。診療をしながら論文を書くことは大変な努力が必要であることは承知しているが、医療の進歩と自分の頭の整理のために内容の優れた多くの論文を投稿して頂きたいと思う。

(杉田 昭)